

パクパ Phags-pa 造『道士調伏偈』について

今 枝 由 郎

モンゴルのモンケ・ハーン（元の憲宗）代（一二五一—一二五九）に前後三回にわたって行なわれた道仏二教の教義論争は、夙に諸先学によって研究され、その概要はよく知られるところである。⁽¹⁾この論争参加者の顔ぶれは、当時のモンゴル勢力範囲の広大さを反映し、ただ単に中国人にとどまらず、周辺各地の異民族をも含めた、極めて多彩なものであり、その中にチベット人の名が見出されるのも又当然のことであつた。⁽²⁾

さて、この論争を扱った従来の研究は主として中国資料に基いており、チベット資料からの考察は決して充分なものとはいえない。今まで唯一人チベット側からのアプローチを試みた Richardson 氏は「一二五八年論争に」Phags-pa が列席していたらしい。」（上引論文 p. 143）と述べてつも、その直後で「Phags-pa と言及されているのは、もしやして Pa ka si pa（即ち Paksi 訳者補）の誤りであるかも知れない。というのは、Chavannes の指摘⁽⁴⁾によれば、一二五八年の論争記録中に用いられている漢字（抜合斯八。訳者補）は、他の文献に用いられているそれとは異っているからである。しかしカルマ派資料からは Karma Paksi がモンケ Môngke の許に行ってから

(一二五六年。訳者補)、クビライ Qubilai のところにそんなに早くもどつていたとは考えられない。」(同 p. 114) と述べ、信頼できる資料の欠如から、結局のところチベット人参列者に関しては何ら決定的なことが言えないままに終っている。それ故、ここでは問題を論争に参加した(或は、した、と伝えられる)この二人のチベット人に限り、主としてチベット資料の側から新しい資料を加えて一論を進めてみたい。

Karma Pakṣi (一二〇六—一二八三) の生涯は、現在のところ明らかに知られていない。⁽⁵⁾ 今問題となる中国での事蹟に関しても同様で、伝説的な、謎に包まれた部分が多い。⁽⁶⁾ しかし Richardson 氏の研究によれば、一二五五年にクビライから招かれ、その年 Ron-nyul gser-stod で彼に謁し、その翌年モンケに呼ばれて Sira Ordo で面謁したことは確かである (p. 143)。その折 Pakṣi が道仏論争に参加した、と伝えるチベット史書が幾つかある。⁽⁷⁾ しかしこの年(一二五六)昔刺行宮 (Sira Ordo) で行なわれるはずであった第二回論争は、道士側の不参加により、実は行なわれずして終っている。⁽⁸⁾ それ故 Pakṣi がこの年の論争に列席したということは、事実上ありえない。そこで、この二年後一二五八年に第三回論争が、場所をかえクビライの新都開平で行なわれていることから、チベット史書の伝えるのは、この第三回論争ではないか、とも考えうる。しかし、Richardson 氏の指摘する通り、一二五六年にモンケの許に行った Pakṣi が、一二五八年に再びクビライのところにもどつていたことを証するチベット資料はなく、他方中国資料にも Pakṣi の名は全く見出せない。⁽⁹⁾ 以上考えてくると、Pakṣi の道仏論争参加は、彼を偉大化する為の後世附加せられた伝説に過ぎないと思われる。

一方 Phags-pa (一二三五—一二八〇) の事蹟は、信頼できるチベット・中国両資料から、かなり詳細に知られ

て⁽¹⁰⁾いる。しかし、ことこの論争参加に関しては、従来中国資料から知られる事柄のみ、ほんの軽く触れられて来たにとどまっている。

ところが、先年東洋文庫から複製出版された『サキヤ派全書⁽¹¹⁾』第七卷『Phags-pa 全書』中第三〇四番に、*Zin-gi ston-pa bul-pa'i chigs-bcad*⁽¹²⁾と題する小論が納められている。表題冒頭の語 *Zin-gin* は既に Laufer が指摘する通り⁽¹³⁾、中国語「先生」の音写であり、道士を意味することから、この著作が、今問題にしている道仏論争に關係したものではないかと思われる。全体の構成を概観してみると、まず表題に続いて帰敬偈があり、次に、全部で三六句（各句は七音節）からなる偈文があり、最後に奥書がある。以下に全文を訳出してみる。⁽¹⁴⁾

〔表題〕 『道士調伏偈』

〔帰敬偈〕 唵吉慶成就 (Om svasti siddham)。ラーと妙音〔菩薩〕に恭敬して帰命したてまつる。

〔偈本文〕 「存在は」有〔である〕或は無〔である〕など〔と主張する〕一切の悪見を摧破し、獅子吼を轟かせる仏に帰命したてまつる。福德・富財が巨大で、分別・智慧が深遠な、人主（≡クビライ）自からが主宰して〔道仏論争が開かれた。論争相手の道士は〕仙人の道に精進することによって、神通眼と神変力を具えてはい⁽¹⁵⁾るが、無始以来の習気によって薩迦邪見に陥っており、正しい解脱に到る道の器とはならないものである。

〔彼等は又〕老君（≡老子）⁽¹⁶⁾「の教え」の信奉者即ち「先生」の中でも最も秀れた師で、自らの教養に通曉せるものと喧伝され、慢心にまかせて常軌を逸すること甚だしくなっていた。〔クビライ〕自身のお言葉にはげまされ、聡明な士（≡Phags-pa）が、金剛〔不壊の〕論理の鋭い鍼のついた、正しい御教えの矢を、智慧の弓

から放った折、「これら道士の」教義・主張は悉く論破され、「道教典籍は」焚滅された。そればかりでなく、彼等の「本来は」清浄である心（＝仏性）の「現在は汚れた」鉄材を、正しい御教えの錬金術の精要とよく混合した後、牟尼の威儀を堅く持する戒精進聖者にと、「Phags-pa」自身「の手」によって転じさせた。

〔廻向文〕 賢者達よ、常しえに喜び給え。この善「行」によって、虚空の端に到るまでの間で、およそ衆生にして、「今だ仏門に」入っていない者、「或は既に入っていないも」誤った見解に陥っている者、彼等が悉く「仏の正しい」御教えに入らん事を！

〔奥書〕 その昔、中国に太上老君⁽¹⁷⁾といって、母の胎内にとどまること八十二年⁽¹⁸⁾にして、生れた時「から」隱世を好み、三昧に精進して、世間の神通と神変を得、自からの弟子達にもその道を会得せしめ、数論⁽²⁰⁾の教理と相通じた教義を説く者が現われた。「今の世に」彼の信奉者で「先生」と呼ばれる集団が非常に夥しくなり、善逝の御教えに害となるのを見給いて、人の主たるクビライの勅により「この邪教は所破たるべし。」とはげまされ、「それを承って」戊午（一二五八）仲夏三日⁽²¹⁾に、長年修業して、自からの宗義の奥義に達した道士一七人を、「Phags-pa」は正「法の論」理によって論破し、出家せしめた。この偈はその日に著したものである。

本文及び奥書に述べられていることは、月日の相違を除いて、他はすべて第三回論争を伝える中国資料と一致している。ここに於て、「Phags-pa」がこの論争に参加していたことは、もはや疑う余地のない確かな事実であると言える。しかも『辯偽録』の伝えるところによれば、この論争に於ける「Phags-pa」の活躍はめざましく、道士を難詰し、仏教側に勝利をもたらす決定的な役割を果たした。『Phags-pa 伝』の著者 Ye-ges rgyal-mchan も「この時、

この大士の誉れ、名声は、津々浦々にまで広まった。」(fol. 169a)と記している。

モンゴル帝室との絆を結ぼうと、チベットの各宗が鎬を削り合っていた当時、一二五三年潜邸でクビライに謁して以来、彼の侍僧であったPhags-paは、こうした機会にもその才能を発揮し、一層クビライの信任を厚くしていたことであろう。⁽²³⁾ そのクビライが汗位に就き、元朝を樹立していったことは、サキャ派にとっては幸運なことだった。以後元朝の権威を後楯に、チベットにサキャ派時代が出現する由縁である。

(東洋文庫チベット研究委員会委員)

註

(1) 論争に関する研究の中、主だったものを年代順に列挙する。

F. Chavannes, *Inscriptions et pièces de chancellerie chinoise de l'époque mongole, T'oung Pao*, Série II, vol. V, 1904, pp. 357~447.

岩井大慧, 「元初に於ける帝室と禅僧との關係に就いて(下)」、『東洋学報』第十一卷一号, 1922, pp. 89~124.

野上俊静, 「元代道仏二教の確執」、『大谷大学研究年報』第十二輯, 1943, pp. 211~275.

高橋義堅, 「元代道仏二教の隆替」、『東方宗教』第十一卷, 1956, pp. 1~22.

P. Demiéville, *La situation religieuse en Chine au temps de Marco Polo*, in *Oriente Polaire*, Roma

1957, pp. 193~236.

H. E. Richardson, *The Karma-pa Sect, A Historical Note part I*, *Journal of the Royal Asiatic Society*, 1958 parts 3 & 4, pp. 139~164.

Joseph Thiel SVP, *Der Streit der Buddhisten und Taoisten zur Mongolenzeit, Monumenta Serica, Journal of Oriental Studies*, Vol. XX, Nagoya 1961, pp. 1~81. (福井文雅氏の御教示による)

(2) 当時の中国に於ける宗教事情に関しては、註1に引いたDemiéville氏の論文が詳しい。

(3) 中国資料と云っても、『元史』にも道教側資料にも、この論争に関する記載は全く見当らず、もっぱら勝者仏教側の『辯偽錄』(大正2116番)と『仏祖歷代通載』(大正2036番)の二つに限られている。それ故に、陳垣氏の如

く、記載が仏教徒側の捏造にかかるとはならないか、と疑う研究者も出た程である(野上 pp. 234, 242, 269, n. 36; 高橋 pp. 11~12)。

(4) *T'oung Pao* p. 384, n. 2. この指摘とつづいて注 6 を参照せられた。

(5) Karma Pakshi 以下、『全書 (gsun-'bum)』九巻があることが知られている (Dhongthog Rimpoché: *Important Events in Tibetan History*, Delhi 1968, p. 73) が、残念ながら筆者未見である。又カルマ派資料の Richardson 氏のそれ以上には検索しておらず、Paksi に関する詳細は今後の研究に俟てようである。

(9) Tucci, G., *Tibetan Painted Scrolls*, Vol. II Rome 1949, pp. 627, 682 n. 61 等参照。

(7) R. A. Stein, *Civilisation tibétaine*, Paris 1962, pp. 54~55, 266, n. 30.

(8) Chavannes, p. 381, 岩井 pp. 93~94, 野上 pp. 234~236, 高橋 pp. 9~10, Demiéville, p. 208, Richardson, p. 143, Joseph Thiel, pp. 37~38,

(6) 上の註 4 の Chavannes の指摘は、'Phags-pa が中国文献の中には種々に音写されているものと書いたものの、Chavannes 自身は「抜合ス八」を 'Phags-pa と解釈している。Chavannes の指摘は正しいが、事実『仏祖歴代

通載』一にに限りてみても 'Phags-pa は、八思馬 (大正巻 43, p. 727c), 發思巴 (p. 725c), 發思八 (p. 705a), 発合思巴 (p. 484a), 発思巴 (p. 490a), 發思八 (p. 477b), 拔思發 (p. 707b), 拔思發 (p. 732c) 等々と写られている。抜合ス八もその一種であることは誤りな。

従来、中国資料に現われる那麻或は蘭麻を Karma Pakshi と同一している研究があるが (岩井 pp. 103~104 n. 82, 高橋 p. 13, Demiéville, pp. 205, 230, n. 90) これは従い難い。『元史』巻二二五鉄哥伝によれば、那麻はカンミール出身で太宗 (1229~41) 定宗 (1246~48) にも面謁している。『新元史』巻六憲宗紀によれば、憲宗元年冬十一月 (一二二五) とは国師に任じられている。その那麻が一二二五年とはじめて中国の地を踏んだ Karma Pakshi と同一人物ではありやなく (Richardson, p. 144)。現在までのところ、中国資料は Paksi に言及したものでないことが見出せな。

(10) 稲葉正就「元の帝師の研究——系統と年次を中心として」『大谷大学研究年報』第十七輯、1964, pp. 79~156 参照。

(11) Sa-skya-pai bla-'bum, *The Complete Works of the Great Masters of the Sa skya Sect of the Tibetan Buddhism*, 15 Vols. Tokyo 1968~1969.

はありえない、とのことであり、今は一応上のように月日の相違を解釈しておいた。

(22) Chavannes p. 385, Demiéville p. 209, 大正卷49, pp. 771~772.

(23) クビライのチベット人に対する考え方については、Demiéville pp. 206, 230, n. 30 を参照。